

『ウルトラマン』における「正義」

角田達朗

「ハヤタ、君は何も感じないか」

科学特捜隊のイデ隊員は、同僚のハヤタ隊員にこう問いかける。その表情はいらだたしげでもあり、哀しげでもある。だしぬけな問いの意味をはかりかねるハヤタに対し、イデはこう続ける。

「仕事のことさ。我々科学特捜隊がどんなに頑張っても、結局敵を倒すのはいつもウルトラマンだ。僕がどんな新兵器を造っても、たいてい役に立たんじやないか。いや、新兵器だけじゃない。我々科学特捜隊も、ウルトラマンさえいれれば必要ないような気がするんだ」

イデはハヤタがウルトラマンに変身することを知らない。イデだけでなく、ハヤタ以外、誰も知らないのである。

ハヤタは答える。

「スーパーガンやスパイダーショット、それにマルス133も立派に敵を倒したじゃないか。それに科特隊がウルトラマンを助けたこともある。アントラーに青い石を投げなかつたら、ウルトラマンはアントラーの犠牲になつたかもしれない。ケムラーと戦った時だって、マットバズーガを撃ち

込まなかつたら、ケムラーの亜硫酸ガスでウルトラマンはやられていたかもしれない。持ちつ持たれつだよ」

この答えにイデは納得しない。当然である。ハヤタの言うように科学特捜隊が怪獣を退治したり、ウルトラマンを助けたりしたことも無いではないが、それは稀なことなのだ。イデは更に言う。

「そうかなあ……。僕はウルトラマンさえいれば十分だと思うんだ」

これは『ウルトラマン』第37回「小さな英雄」の一場面である。脚本を担当した金城哲夫は『ウルトラマン』のメインライターだ。この回では、その後、人間とほぼ同じ大きさの善良な怪獣ピグモンが科学特捜隊を怪獣たちの攻撃から護ろうとして命を落とし、これを目の当たりにしたイデがウルトラマン頼みの姿勢を改める。そして、ウルトラマンは怪獣に自らとどめを刺さず、イデにその功を譲る。こうしてイデは迷いから覚めることになるのだが、そもそもイデの疑問はこのようなことで解消するはずのものではない。イデが思い悩んでいたのは、要するにウルトラマンによって科学特捜隊の存在理由が不可避的に希薄化するという根源的な問題であ

る。メインライター自ら決定的なウルトラマン批判を登場人物に語らせ、そして、おざなりな答えでお茶を濁す。これは一体どうしたことなのか。

イデも言うように、人類の脅威となる怪獣や宇宙人などを退治するのは、たいていウルトラマンである。人類の脅威と戦うことを任務とする科学特捜隊にとって、ウルトラマンはありがたい存在に違いないが、やはりイデの言うとおり存在理由を脅かすことにもなる。とはいえ、それは『ウルトラマン』の番組構想の基本中の基本である。最終回間近になってようやくそのことに疑問を呈するのは、いかにも不自然だ。金城が脚本を書き続ける中で、何か重大な問題に行き当たったことは間違いない。ただし、それはイデに仮託した言葉では語り尽くせないものだったのではあるまいか。

『ウルトラマン』と題するテレビ番組が初めて放映されたのは一九六六年七月のことである。当初から高い視聴率を誇った『ウルトラマン』は翌年四月に放映を終えたが、その後シリーズ化されて、現在も新作が作られている。ウルトラマンは、かつて子供時代に熱中した世代にとって忘れ難い存在であるだけでなく、今でも大変人気のある変身ヒーローである。変身ヒーローの常として、ウルトラマンも当然のように「正義の味方」と称される。私見では、メインライター金城の行き当たった問題の核心は、まさにその「正義」にある。

言うまでもないことだが、現実の世界における「正義」は必ずしも普遍的原理ではない。ブッシュにはブッシュの「正義」があり、フセインにはフセインの「正義」があり、金日正には金日正の「正義」がある。それが

実態だ。もちろん、このように乱立する「正義」は偏った主張に過ぎず、本当の正義ではないと言うこともできる。実際の所、人間は「人を殺すな」「人の物を盗むな」等の規範をおおむね守っている。その意味で、普遍的原理としての「正義」は単なる絵空事でもない。

それでは、ウルトラマンの「正義」とはどのようなものなのだろうか。そして、どれほどの普遍性を認めることができるのだろうか。

*

『ウルトラマン』第1回「ウルトラ作戦第1号」で、宇宙からやって来たウルトラマンは科学特捜隊隊員ハヤタの乗ったジェットビートルに誤って衝突し、ハヤタに致命傷を負わせてしまう。この時、ウルトラマンはハヤタを透明な球体に包み、その中に姿を現して「M78星雲の宇宙人」と名乗る。ウルトラマン自身の語る所では、宇宙の平和を乱す悪魔のような怪獣ベムラーを宇宙の墓場に運ぶ途中、ベムラーに逃げ出され、それを追って地球に来たのである。ウルトラマンはハヤタに謝罪し、「その代わりに私の命を君にあげよう」「君と一心同体になるのだ。そして、地球の平和のために働きたい」と申し出る。こうしてウルトラマンはハヤタと合弁し、ハヤタはウルトラマンに変身できるようになる。

宇宙の平和を乱す者を護送していたことから、ウルトラマンは宇宙における警察官のような役割を担っていたと考えられる。彼が地球を訪れたのは、ベムラーが脱走して地球に逃げ込んだからである。自らの過失に一種の偶然が加わった結果であって、自らの意志でもなければ、何らかの使命

によるものでもない。彼が地球に留まるのは、自らの過失のせいで地球人の命を奪ってしまったことへの償いである。ウルトラマン自身にとっても所属組織にとっても想定外のことであり、本来の職務を放棄することを意味する。宇宙の警察組織は当然相応の規模を有し、おおぜいの人員を擁しているはずだから、ウルトラマン一人が離脱したところで重大な支障が生じることはないのだろうが。

警察組織と言えば、第1回の冒頭に次のようなナレーションが流れる。パリに本部を置く国際科学警察機構の日本支部に科学特捜隊と呼ばれる五人の隊員たちがあつた。彼らは怪事件や異変を専門に捜査し、宇宙からのあらゆる侵略から地球を防衛する重大な任務を持っていた。

ウルトラマンが「一心団体」になった相手もやはり警察組織に属する者だった。これも偶然である。奇遇と言つても過言ではない。いずれにせよウルトラマンが、ハヤタと合体することが地球の平和のために働くことに直結すると考えたのは、ハヤタの職業にもよるに違いない。おそらく一種の超能力によってハヤタの意識や記憶を読み取り、ハヤタが科学特捜隊という警察機構に所属していることを知ったのであろう。

さて、上記のナレーションにおいて、科学特捜隊に二通りの任務のあることが語られている。一つは「怪事件や異変を専門に捜査」することであり、もう一つは「宇宙からのあらゆる侵略から地球を防衛する」ことである。ウルトラマンはハヤタと合体することによって事実上、科学特捜隊の

一員となる。それで、この二つの任務をウルトラマンも担うことになるのだ。「怪事件や異変」なるものが宇宙からの侵略に関連して起こることも考えられるから、この二つは全く無関係というわけではないかもしれない。しかし、必ず関連して起こるなら、わざわざ宇宙からの侵略とは別に「怪事件や異変」を挙げるまでもない。したがって、『ウルトラマン』には宇宙からの侵略とは別種の「怪事件や異変」も描かれているに違いない。

*

ここで、「侵略」という概念について検討しておこう。「侵略」の「侵」は侵入・侵攻の「侵」であり、勝手に立ち入ることである。「略」は略奪・略取の「略」であり、奪い取ること。「掠」と書く場合も同義である。更に、「侵略」を辞書で引くと以下のように規定されている。

A. 他国又は他人に対し不当な武力攻撃を加え、侵入して領土や財物を奪い取ること。(『新潮現代国語辞典』新潮社 一九八五年)

B. 自分かつてな利己的な国家利益にもとづいて、相手国に武力攻撃を加えることである。経済的な手段やイデオロギーで相手国を自国の支配下におくことも、広い意味で侵略である。(『世界大百科事典

16』平凡社 一九七四年)

この二つの規定には、違いが二点ある。一つは、Aが侵略の手段を武力に限定するのに対して、Bはその他の手段も含まれるとする点である。もう一つは、Bが国家間の事に限定するのに対して、Aは「他国又は他人に対して」として侵略の起こる領域を広く設定する点である。『ウルトラマン』

において、ウルトラマンと科学特捜隊が立ち向かう相手は宇宙人や怪獣であつて国家ではなく、宇宙人や怪獣の攻撃が武力によるとも限らない。そこで本稿では、侵略の起こる領域を国家間に限定せず、侵略の手段も武力に限定しないものとする。この前提に立ち、A・Bの記載を踏まえて、『ウルトラマン』に当てはまるように改めて規定するならば、「侵」とは他者の占有している領域に正当な手段によらずに入り込むことであり、「略」とは相手の領域の一部または全部を占領したり、相手の組織や所属者を支配したり、相手の財物を強奪したり所属者を拉致したりすることである。残る問題は、Aの言う「不当」、Bの言う「自分かつて」という部分である。どのような場合に「不当」「自分かつて」であると見なされるのか、その規定は両書ともに見られないが、行う側がルールに違反しているという意味であることは間違いない。侵略は重大なルールに違反する犯罪行為である。だからこそ、これと戦うことが「正義」とされるのだ。それでは、「ルール違反」という概念はどのような場合に適用されるのだろうか。次に、「侵略」という言葉が通常どのように使われるかを検証してみよう。

我々が「侵略」と呼ぶ行為の中で最も一般的なのは、ある国が他国の領土・領海・領空に軍隊や工作員を送り込み、相手国の領土・領海・領空の一部または全部を占領したり、相手国の政治組織や人民を支配したり、相手国の財物を強奪したり人民を拉致したりすることである。国と国の間には互いに守るべきルールが存在する。これに違反して他国の領域を侵せば、侵略となる。

相手の領域に入り込み攻撃する手段を武力に限定しないという前提で、もう一つ例を挙げよう。ある企業が別の企業の役員の一部を買収し、その企業を意のままに操るとしよう。企業の経営はその企業の占有する領域である。ある企業が他の企業の経営を左右するとしたら、それは支配である。同種の他者が占有する領域を不正な手段を用いて支配するのだから、これも侵略の一種と言える。

反対の例を挙げよう。ネズミやゴキブリは人間に無断で人間の住まいの中に住み着き、渡り鳥は日本政府に無断で日本に飛来して営巣する。我々はこうした事例を「侵略」とは呼ばない。クマが山から里に降りて田畑を荒らしたり人家を襲ったりすることがある。我々はこうした事件も「侵略」とは呼ばない。ネズミやゴキブリや渡り鳥やクマは人間とは別種の生物である。彼らはただそれぞれの本能に従うだけだから、人間が決めた約束事が通用しない。

これらの例から、次のように言うことができる。侵略という概念は行う側が受ける側と共通のルールに従うべきである場合にのみ適用される、と。国と国、企業と企業は同種の存在であり、共通のルールに従わなければならない。それに従わなければルール違反とされる。動物は人間と共通のルールに従うべき存在とは言えないから、動物が人間のルールに従わなくても、ルール違反とはされない。

以上の考察に拠り、本稿では、以下の三つの条件をすべて充足する行為だけを「侵略」と判定する。言い換えれば、以下の三つの条件の一つでも

充たさない場合は、侵略とは別種の「怪事件や異変」と見なすのである。

- a. 相手と共通のルールに従うべきであるのに、それを無視する。
- b. 相手が占有する領域に自ら入り込むか、または何らかの威力を有するものを入り込ませる。

c. 占領・支配・強奪・拉致を目的として行動する。

a について付言すれば、ウルトラマンおよび科学特捜隊が戦う相手にどの程度の知能があるかが目安になる。そして、知能程度を判定する基準となるのは、言語および文明である。言語を持つくらい知能がなければ、人間のルールを理解することはできない。言語を持つことが直接描写されていない場合でも、文明が存在することが見て取れば、相当に高い知能を持つと判断できる。また、言語を持つことなしに明瞭な目的意識を持つこともないはずであるから、占領・支配・強奪・拉致を目的として行動することもあり得ない。したがって、知能程度はcの判定も左右する。

*

『ウルトラマン』の放送回数は全部で三十九回ある。このうち、第26回と第27回は二話完結の前編と後編であるから合わせて一話と数えると、全三十八話となる。

既述のように、ウルトラマンの戦う相手が上記の三つの条件をすべて満たしていれば、相手は侵略者である。その場合、戦いの正当性は明白である。しかし、そのような設定の話は意外なほど少ない。地球人とほぼ同等かそれ以上の知能を有する知的生命体が、占領・支配・強奪・拉致・殺傷・

破壊を目的として宇宙から侵入して来るのは、第2回「侵略者を討て」、第16回「科特隊宇宙へ」、第18回「遊星から来た兄弟」、第28回「人間標本5・6」、第33回「禁じられた言葉」、第39回「さらばウルトラマン」の六話しかないのである。この六話では、ウルトラマンが戦う主な相手は宇宙人である。宇宙人は、地球人と同等もしくはそれ以上の知能を有する知的生命体である。彼らは地球が自分の占有する領域でないことを理解している。そして、もしも自分たちの星が占領されたり、自分たちが支配されたり拉致されたり、自分たちの財物を強奪されたりしたら、地球人と同様に抵抗するに違いない。つまり、地球人と共通のルールに従うべき存在である。したがって、宇宙人が地球を占領しようしたり、地球人やその他の生物を支配または拉致しようしたり、地球人の所有物を強奪したりしようとするのは、侵略に当たる。自ら「地球をもらう」と明言するバルタン星人(第2回)はその典型である。

自分の星から「人間標本を六つ持って来い」と指令されたダダ(第25回)も侵略者である。ダダも人間と同様の知的生命体であって、地球人が自分と同様の知的生命体であることを知りながら、地球人に無断で地球に侵入して地球人を略取し、標本にして持ち去ろうとする。被害は比較的小規模だが、これがルールに違反する犯罪行為であることは明白である。人間の心に挑戦し、地球人の心を手に入れようとするメフィラス星人(第33回)は武力による攻撃はしないが、手段は重要ではない。メフィラス星人が地球に侵入し地球人の心に挑戦するのは、地球人の領域に不当に入り込むこと

である。地球人の心を手に入れるというのは支配の類いと考えられる。よって、これも侵略である。ザラブ星人(第18回)は「自分は地球を支配しに来た」とも「狙った星を互いに戦わせて滅ぼすことが仕事なのだ」とも言っており、目的がやや判然としないが、おそらく最終目的は滅ぼすことにあり、そのための過程として支配があるのだろう。いずれにせよ、支配も一つの目的には違いない。その上、最終的には滅ぼすのだから、最も悪質な侵略である。

なお、第39回すなわち最終回では、名称不明の宇宙人が怪獣ゼットンを使役している。宇宙人は科学特捜隊が撃滅するが、ゼットンが科学特捜隊基地を襲撃し、ウルトラマンはこれに立ち向かう。この場合、ゼットンは宇宙人に従属する生物兵器と考えられるから、ウルトラマンの戦いも侵略との戦いに属する。

以上のほかに、宇宙から地球に来た者をウルトラマンが何らかの形で排除する話として、以下の五話を挙げることができる。

第1回「ウルトラ作戦第1号」。ウルトラマンは自分が護送している最中に逃亡した怪獣ベムラーを退治する。ベムラーはウルトラマンに追われて地球に逃げ込んだのであり、湖に逃げ込んではいるが、そのまま湖を占有するつもりだったか否か判然としない。しかし、ウルトラマンによれば、ベムラーは「宇宙の平和を乱す悪魔のような怪獣」であるから、そのまま放置すれば、必ずや地球に甚大な被害を与えることが予想される。ベムラーは既に宇宙の平和を乱す行為をしており、そのせいで「宇宙の墓場」に

連行されていたのであるから、これを逃がしてしまったウルトラマンが退治することは、逃がした責任を取るという意味でも、予防措置としても、妥当と言える。

第11回「宇宙から来た暴れん坊」の怪獣ギャンゴはもとは宇宙から落下した隕石だった。鉱物でありながら生物のような性質を有し、人間の思念を受けてその通りに姿を変えるが、その特性を悪い心を持つ人間に悪用されて怪獣となったのである。ウルトラマンはギャンゴと戦い、隕石に戻った所を宇宙へ運び去る。直接には地球人が引き起こしたトラブルであるから、理想を言えば地球人によって解決されるのが最も望ましい。だが、宇宙から来た物体の特殊な力によるトラブルであるから、地球人だけで十分対処できなくても仕方ないことではある。したがって、ウルトラマンの行いは地球人に対する単純な親切と言える。

第17回「無限へのパスポート」のブルトンももとは隕石である。同時に落下した二個の隕石に科学者が熱線を浴びせた結果、融合して鉱物とも生物ともつかない奇妙な物体となり、空間を四次元化して奇怪な現象を起こすようになった。ウルトラマンはブルトンと戦い、隕石に戻った所を握り潰す。地球人の誤った行為が深刻な事態を引き起こしているが、宇宙から来た物体の特殊な力によるトラブルであるから、地球人だけで十分対処できなくても仕方ないことではある。ここでも、ウルトラマンの行いは地球人に対する単純な親切と言える。

第34回「空の贈り物」では、怪獣スカイドンが宇宙から隕石のように落

下して来る。スカイドンは口から火を吐いて周囲を火の海にする。科学特捜隊がスカイドンを宇宙に帰そうと様々な作戦を立てるが、ことごとく失敗し、最後にウルトラマンが空中でスカイドンに体当たりして爆破する。これも地球人に対する単純な親切と言える。

第35回「怪獣墓場」では、日本の打ち上げたロケットが宇宙の怪獣墓場で骨ばかりの怪獣シーボーズに接触し、シーボーズごと地球に落下する。シーボーズが宇宙に帰りがかりであったから、科学特捜隊はシーボーズをロケットで宇宙に帰そうとし、ウルトラマンがシーボーズを追い立ててロケットにしがみつかせ、怪獣墓場に送り返す。これは地球人だけでなく、シーボーズに対しても親切な行いと言える。

以上の五話と類似するものに、第15回「恐怖の宇宙線」がある。子供たちが土管に落書きした怪獣ガヴァドンが、特殊な宇宙線的作用によって実体化してしまい、ウルトラマンはガヴァドンと戦って宇宙へ運び去る。ガヴァドンは子供の落書きから生まれたのだから、宇宙から来たものではない。しかし、特殊な宇宙線的作用によって偶然実体化したのだから、本来地球にいるべき者とは言えないし、地球人だけで十分対処できなくても仕方がない。この場合も、ウルトラマンの行いは地球人に対する単純な親切と言える。ちなみに、ガヴァドンは土管に落書きしたものだから子供たちに所有権があるわけではないが、ウルトラマンは毎年七夕の夜にはガヴァドンに会わせると約束しており、子供たちへの配慮も見せている。これらの六話はいずれも、前掲のナレーションに言う「怪事件や異変」

に分類すべきものである。ウルトラマンの戦う相手は侵略者とは言えないからだ。言語や文明を持つ知的生命体ではなく、占領・支配・強奪・拉致を目的として地球に来たのでもない。しかし、本来地球に在るべきでない者を排除するのだから、ウルトラマンの行いも妥当なものと言える。

以上のように、侵略者であるか否かにかかわらず、本来地球に在るべきでない者を相手とする場合には、ウルトラマンの戦いに正当性を認めることができた。しかし、これらを合計しても十二話しかない。

*

『ウルトラマン』の中で一番多い設定は、ウルトラマンが地球に棲息する野生の怪獣と戦うものである。第3回「科特隊出撃せよ」、第6回「沿岸警備命令」、第7回「バラージの青い石」、第8回「怪獣無法地帯」、第9回「電光石火作戦」、第10回「謎の恐竜基地」、第13回「オイルSOS」、第14回「真珠貝防衛指令」、第19回「悪魔はふたたび」、第21回「噴煙突破せよ」、第24回「海底科学基地」、第25回「怪彗星ツイフォン」、第26・27回「怪獣殿下」、第29回「地底への挑戦」、第30回「まぼろしの雪山」、第32回「果てしなき逆襲」、第36回「整つな！アラシ」、第37回「小さな英雄」と、合わせて十八話もある。実に半数に届くという勢いである。これらに登場してウルトラマンや科学特捜隊と戦う怪獣たちは、人間のような知的生命体ではない。人間の知能の高さを示す言語と文明を、彼らは持っていない。本能に基づいて行動するだけで、言語化された明確な目的意識によって行動することはなく、人間が決めた国境や財

産等の約束事とも無縁な存在である。要するに、野生の怪獣は人間と共通のルールに従うべき存在ではないから、本能のおもむくままに占領・支配・強奪・拉致を行っても、侵略とは言えないのだ。典型的なパターンは、生命維持の本能に従ってエネルギーを補給しようとした結果、人間の生活領域に出現するというものである。電気をエネルギーとするネロンガ(第3回)、カカオ豆を好物とするゲスラ(第6回)、ウランを食べるガボラ(第9回)、石油を食料とするペスター(第13回)、真珠を食べるガマクジラ(第14回)、金を食べるゴルドン(第29回)等々、枚挙に暇がない。人間のルールを適用すれば、彼らは人間の生活領域に侵入して人間の財物を奪っていることになるが、それは決して公平な見方ではない。

他の生物が人間に何らかの危害を及ぼす場合、人間がこれを排除しようとするのはもちろん防衛である。必要とあれば、人間がその生物を殺害することもやむをえない。しかしながら、その生物がもともと地球に棲息するものである場合、客観的に見れば一種の生存競争であって、正義の戦いとは言えない。まして地球の外から来たウルトラマンがそこに割り込み、一方の側について他方を抹殺するのは、全く公平を欠く。これでは「正義の味方」ではなく「人間の味方」に過ぎない。

相手が怪獣ではなく知的生命体であっても、もともと地球に棲息しているものであれば、同様に考えなければならない。地球に棲む知的生命体が登場する話として、以下の五話を挙げる事ができる。

第4回「大爆発5秒前」では、海底原人ラゴンが、地上の人類が製造し

た原爆の放射能を浴びたせいで巨大化し、帰巢本能も狂ってしまう。そして、体に原爆を付着させた状態で船を襲い、地上に上陸して来る。ラゴンは地上人類の核開発の犠牲者である。被害の拡大を防ぐために科学特捜隊が戦うのはやむをえないとしても、ウルトラマンが地球の知的生命体どうしの戦いに介入して不幸な側を殺害するのは正当ではない。

第12回「ミイラの叫び」では、七千年前の人間のミイラが科学センターに收容されるが、機器の誤作動によって息を吹き返す。ミイラは警備員や警官を次々殺して逃走するが、科学特捜隊に射殺される。ミイラの死ぬ際の叫びに依って怪獣ドドンゴが出現し、ウルトラマンはこれを退治する。ミイラは人間を次々殺しているが、自分の墓に戻りたい一心でしたことである。これを科学特捜隊が射殺したことにも疑問が残るが、そのことはウルトラマンの問題ではない。ミイラを救出するために現れたドドンゴをウルトラマンが殺害するのが正当か否かは判定不能である。ドドンゴがミイラに操られる生物兵器に過ぎないなら、ミイラの死後にドドンゴが暴れるのは本来の目的を欠いた無意味な行為に過ぎない。そうであれば、ウルトラマンがドドンゴを退治して無意味に被害が拡大するのを食い止めるのは、妥当な行動と言える。反対に、ドドンゴが自分の意思を持つ存在で、ミイラの復讐のために暴れるのであれば、ウルトラマンの行いは不当な干渉と言わざるをえなくなる。あいにくドドンゴはミイラの死後に現れるだけで、ドドンゴとミイラの関係は明確に描かれないから、ドドンゴが意思有る存在か意思無き兵器かも定かでない。

第22回「地上破壊工作」に登場するのは地底の人類である。彼らはかつて地上に住んでいた古い人類であるが、氷河期の地殻変動による環境の悪化を避け、地下に潜って生活していた。再び地上に出て地球を征服し人類を奴隷にしようと考えた地底人たちは、ハヤタがウルトラマンに変身することを知り、予めハヤタを誘拐した上で、怪獣テレスドンを操って地上を攻撃する。地底人はウルトラマンをも自由に操ろうとしてハヤタを変身させるが、その際の強烈な発光によって自滅する。ウルトラマンは地上に出てテレスドンを倒す。地底人の行いは、地上の人類にとっては侵略だが、地底人の側からすれば、自分たちの留守中に地上を占領した現人類こそ侵略者であり、自分たちは失地回復を企てているだけだということになる。いずれにせよ、客観的に見れば一種の生存競争に違いない。ウルトラマンは地球の知的生命体どうしの生存競争に巻き込まれたわけである。地底人はウルトラマンの意思とは無関係に自滅したのであるから、ウルトラマンの正義について判定する対象とはならない。テレスドンは地底人に操られているから、完全な生物兵器である。地底人が自滅した後のテレスドンの破壊活動はもはや本来の目的を欠いた無意味な行為に過ぎない。したがって、ウルトラマンがテレスドンを殺害して被害の拡大を食い止めるのは、妥当な行動と言える。

第23回「故郷は地球」では、人間が怪獣化する。宇宙飛行士ジャミラの乗ったロケットは故障して異星に漂着したが、本国は宇宙開発の失敗を隠すためにジャミラを見捨てた。ジャミラは異星の環境に適応して怪獣化し、

人類に復讐するべくロケットを改造して地球に帰還する。科学特捜隊はジャミラが人間であることを知って動揺するが、パリ本部の指令は「ジャミラを極秘理に抹殺せよ」というものだった。科学特捜隊は怪獣化したジャミラが水に弱いことを突き止め、降雨弾で攻撃。最後はウルトラマンが水流を浴びせるとどめを刺す。これは地球人どうしの争いであるから、地球人どうしで決着すべきである。しかも、それは一人対人類という多勢に無勢の争いである。ウルトラマンがこれを仲裁するならともかく、一人の側を一方的に殺害するのは正当ではない。

第31回「来たのは誰だ」でも、地球の知的生命体どうしの生存競争が描かれている。移動型吸血植物ケロニアが進化して高度な知能を持ち、人類に宣戦布告する。人類を滅ぼして植物人間の世界を作ろうというのである。ケロニアは巨大化して街を破壊するとともに、円盤群を世界中へ飛ばす¹¹。科学特捜隊がこれに立ち向かうが、円盤の数が膨大で追撃しきれない。結局ウルトラマンが巨大化したケロニアを倒し、円盤群も爆破する。この話では第22回と異なり、ウルトラマンは積極的に人類に加担している。生存競争への不当な干渉そのものである。

以上のように、ウルトラマンの行動が妥当なものと評価できるのは一話のみであり、他の四話はすべて「正義」とは言えないものである。

ウルトラマンが地球の生命体と戦う話は、ほかにもまだ二つある。どちらの話も登場する生命体は特殊なものである。

第5回「ミロガンダの秘密」に登場するミロガンダは、元はオイリス島

に自生する植物だったが、調査団が採取して日本に持ち帰り、品種改良のために放射線を照射したせいで、怪物化して移動する能力を身に付けたのである。オイリス川の水を栄養源とするミロガンダは栄養を補給するために、その水を飲んだ調査団の人々を襲う。科学特捜隊が攻撃すると、攻撃のエネルギーを吸収して巨大な怪物グリーンモンスになってしまう。そこで、ウルトラマンがグリーンモンスを焼き殺すのである。ミロガンダは地球に棲息する生物であるが、放射線によって怪物化したのだから、もはや野生のままではない。その点に着目すれば、本来地球に在るべき生物ではないと言えなくもない。しかしながら、トラブルの原因は専ら地球人によって作られており、地球の外から来たものが関わっているわけではないから、地球人の手で解決すべき事件である。しかも、グリーンモンスは科学技術の濫用によって奇形化を強いられた生物だから、人類の科学技術の被害者でもある。ウルトラマンが人類の側に立つのは正当とは言えない。

第20回「恐怖のルート87」では、とある少年が自動車事故で死んで以降、怪獣ヒドラが出現して自動車を襲うようになる。科学特捜隊はヒドラに立ち向かうが苦戦し、ウルトラマンもヒドラを攻撃するが、ヒドラの背中に死んだ少年の姿を見て結局逃がしてやる。少年が生前、ヒドラそっくりの石像を設計し、「ヒドラは本当にいるんだよ」と語っていたことから、ヒドラは実在の生物と思われ、ヒドラの背中に少年の姿が一瞬見える場面があることから、死んだ少年の魂がヒドラに乗り移っているものと考えられる。この話でも、トラブルの原因は専ら地球人によって作られている。

ヒドラが専ら自動車を襲うのも復讐のためであろう。人間の魂がヒドラに乗り移っているのであれば、実質は地球人どうしの争いであるから、地球人どうしで決着すべきである。しかも、それは一人対社会という多勢に無勢の争いである。ウルトラマンが一人の側を一方的に攻撃するのは正当ではない。

最後に残ったのは、ウルトラマンならびに科学特捜隊が地球以外の星に行き、その星の怪獣と戦う話である。この設定を取るのは、第38回「宇宙船救助命令」のみである。科学特捜隊が有人宇宙ステーションの危機を救うべくQ星におもむき、キーラとサイゴという二頭の怪獣に遭遇する。科学特捜隊はサイゴを倒すが、キーラに苦戦する。そこでウルトラマンがキーラを念力で宇宙の彼方に飛ばすのである。キーラとサイゴはいずれも言語や文明を持っておらず、その知能は人類よりも著しく低いと考えられる。地球に侵入してもいないし、占領・支配・強奪・拉致を行ってもいない。地球人が自分たちの領域に入り込んで来たから、防衛本能に従って攻撃したまでである。その一頭を科学特捜隊が殺害するのは、侵略に近い行いである。同様の理由により、ウルトラマンがもう一頭を退治するのも正当ではない。

以上で、『ウルトラマン』三十八話のすべてについて検討したことになる。これを集計すると、ウルトラマンの戦いに正当性が認められるものは計十三話に止まる。その内、「宇宙からのあらゆる侵略」との戦いは六話のみで、残り七話は「怪事件や異変」の類いである。これに対し、正当性

が認められないものはすべて「怪事件や異変」の類いで、計二十四話あり、同じ「怪事件や異変」の類いには、正当性が有るとも無いとも決め難いものも一話あった。それにしても、正当性が有ると認められるものが全体の三分の一強しかないとは、「正義の味方」としては失格と言うほかない。ここで当然考えられることは、番組の構想が十分練り上げられたものではなかったということである。

*

『ウルトラマン』はテレビ番組に初めて本格的な特撮技術を持ち込んだ『ウルトラQ』の成功を受け、その続編として企画された。『ウルトラQ』にはウルトラマンのような超人は登場せず、おおむね人間と怪獣や宇宙人との戦いを描いていた。続編の企画を練る過程で、正義のヒーローが登場することに決まったのだが、『ウルトラQ』との連続性という点から見れば、『ウルトラマン』に怪獣も宇宙人も登場するのは自然な成り行きである。『ウルトラマン』のオープニングでは、まず「ウルトラQ」というタイトルが現れ、それが「ウルトラマン」に改まって主題歌が始まる。これを見ても、作り手が『ウルトラQ』との連続性にこだわっていることは明白である。それで結局、ヒーローが戦う相手については再検討されないまま製作が始まったのであろう。

ちなみに、番組主題歌「ウルトラマンの歌」（作詞 東京一／作曲・編曲 宮内國郎）の歌詞は、番組の製作作業が始まる時点でも番組の構想が固まっていなかったことを露呈している。

胸につけてる マークは流星
自慢のジェットで 敵をうつ
光の国から ぼくらのために
来たぞ 我等の ウルトラマン

手にしたカプセル ピカリと光り

百万ワットの 輝きだ

光の国から 正義のために

来たぞ 我等の ウルトラマン

手にしたガンが ビュビュンとうなる

怪獣退治の 専門家

光の国から 地球のために

来たぞ 我等の ウルトラマン

各連の結びから考えれば、この歌詞はすべてウルトラマンのことを述べているはずである。しかし、実際にはかなりの部分が科学特捜隊のことである。第一連の「胸につけてる マークは流星」は科学特捜隊の隊員たちが流星をかたどった小型無線機を胸につけていることをさす。「自慢のジェット」は科学特捜隊の戦闘機であるジェットビートルのことに違いない。

ウルトラマンは銃器を使用しないから、第三連の「手にしたガンが ビュビュンとうなる」も科学特捜隊の光線銃などの銃器のことであろう。「怪獣退治の専門家」というのもはたしてウルトラマンのことなのか判然としない。ウルトラマンの任務として明らかなのは、怪獣ベムラーを「宇宙の墓場」と呼ばれる場所に護送してただけであり、それだけではウルトラマンが「怪獣退治の専門家」と称するにふさわしい存在なのか否か、判断し難いからである。むしろ「怪事件や異変を専門に捜査し、宇宙からのあらゆる侵略から地球を防衛する重大な任務」を帯びるとされる科学特捜隊の方がふさわしいようにも思われる。第一連の「手にしたカプセルピカリと光り／百万ワットの 輝きだ」はハヤタがウルトラマンに変身する時に用いるベータ・カプセルのことをさす。ウルトラマンに直接関係する具体的描写はここだけしかない。しかも、これとてベータ・カプセルを使用するのはウルトラマンではなくハヤタである。ウルトラマン自身については、光の国から来たということが、三つの連で同じように繰り返されるばかりなのだ。作詞者の東京一（あずま・きょういち）は『ウルトラマン』の主要な監督の一人であり、企画に構想段階から参画していた円谷一のペンネームである。その人にしてウルトラマンと科学特捜隊とを区別して書けなかったという事実が、構想の未整理を如実に物語っている。

今、ウルトラマンと科学特捜隊の混同ということを指摘したが、まさにこの混同こそ、ウルトラマンの正義を偏ったものにしてしまった要因である。既述のように、ウルトラマンの戦いに正当性が認められない話ではす

べて、ウルトラマンが地球生物間の生存競争に介入し、決まって人類に担っていた。人類と他の生物との間に生存競争が生じた場合、人類の組織である科学特捜隊が人類の側に立って戦うのは当然のことだが、ウルトラマンは地球外の存在だから、本来中立を保つべきである。しかし、ウルトラマンはハヤタと「一心同体」となることによつて、科学特捜隊ともほとんど一体化しており、まず科学特捜隊の一員ハヤタとして戦つてから、ウルトラマンとしてもその延長線上で戦う。そのせいで、作り手も視聴者もウルトラマンが重大なルール違反を犯していることに気づきにくいのである。

なお、ウルトラマンの姿形は（当然と言えば当然のことだが）人間に酷似している。これに対して、怪獣の姿形はたいてい人間に似ていない。このことも、ウルトラマンが人間に味方して怪獣と戦うことを当然のことのように錯覚させる要因の一つだろう。とはいえ、第31回に登場するケロニアは人間と同等以上の知的生命体であり、姿形もかなり人間に近い。第22回の地底人に至つては、暗い地底での生活のせいで目が退化している以外は、地上の人類と何ら変わりが無い。ケロニアや地底人の行動は、人類の側から見れば侵略の類いであるが、客観的に見れば優勝劣敗による自然淘汰の過程に過ぎない。このような場合でも、視聴者はウルトラマンが自分たち人間の側に立って戦ってくれることを期待する。そして、ウルトラマンはその期待を決して裏切らない。

*

それでは、ウルトラマンがハヤタと「一心同体」になるとは、どういうことなのだろうか。

ウルトラマン自身はハヤタとの会話の中で「遠い宇宙から」来たと言っており、また、主題歌でも作中でもウルトラマンの故郷は「光の国」と呼ばれる。空の彼方にある光あふれる場所、それは「天」である。超人的能力を駆使して人間を災厄から救う宇宙人とは、要するに天から降臨した神である。最終回で、ソフィーによってウルトラマンとハヤタが分離されると、ハヤタにはウルトラマンと衝突してからの記憶が全く残らない。これは神がかりによく見られる現象である。ウルトラマンがハヤタと「一心同体」になるとは、神が人間に憑依すること、いわゆる「神がかり」なのだ。このような民俗宗教的なモチーフを採用したのが、メインライターであり、第1回・最終回の脚本も担当した金城哲夫¹⁵⁾だったことは間違いない。沖繩にはユタという巫女が今もあちこちにおいて、神がかり信仰が生活の中に生きている。金城はまだ米軍占領下だった沖繩から「沖繩と日本の架け橋になりたい」という抱負を持って東京に出て脚本家になったという。金城にとってウルトラマンが人間に神がかりするという設定は、作品の中に沖繩の伝統文化を活かすことであるとともに、「沖繩と日本の架け橋」の象徴的表現でもあったに違いない。

ところが、ウルトラマンは「正義の味方」と呼ぶにふさわしい公平中立の存在にはならなかった。ウルトラマンは人間を特別視し、超人的な力で人間だけを守る。ハヤタはイデにウルトラマンと科学特捜隊の関係を

「持ちつ持たれつだよ」と語るが、両者が持ちつ持たれつ¹⁶⁾の関係を築くことで、地球に棲む怪獣たちは圧迫されるばかりとなる。この構図は、超大国アメリカの世界戦略とそれに迎合的な日本の政策によって沖繩が圧迫されるのと、ほとんど瓜二つである。これでは、ウルトラマンとハヤタの「一心同体」も、「沖繩と日本の架け橋」どころか、日米の政治的軍事的癒着の戯画でしかない。

金城は脚本を書き続ける中で、ウルトラマンの正義のいびつさを否応なく痛感したに違いない。最終回「さらばウルトラマン」から、その苦しい心境を窺うことができる。ウルトラマンは侵略者の生物兵器であるゼットンに少しのダメージも与えることができないまま、実にあっけなく敗れて息絶えてしまい、代わって科学特捜隊が「昨日完成したばかり」という新兵器でいともたやすくゼットンを退治するので。ウルトラマンがゼットンに立ち向かっている間、彼らはただ遠巻きにして声援を送るだけだったにもかかわらず……。するとそこに、ウルトラマンを連れ帰るべくM78星雲からもう一人、ウルトラマンによく似た宇宙人ゾフィーが飛来する。彼はウルトラマンに対して「地球の平和は人間の手でつかみ取ることに価値がある。ウルトラマン、いつまでも地球にいてはいかん」と説く。この後、ウルトラマンはもう二度と地球に戻ってこないのかと心配する隊員たちに対し、ムラムツ隊長も「地球の平和は我々科学特捜隊の手で守り抜いていこう」と、同じ趣旨を告げている。総じて、本当はウルトラマンなんていない方が良かったのだ、と暗に語るような異様な結末なのである。

この、ゾフィーとウルトラマンの会話は実に意味深長である。

「さあ、私と一緒に光の国に帰ろう、ウルトラマン」

「ゾフィー、私の体は私だけのものではない。私が帰ったら、一人の地球人が死んでしまうのだ」

「ウルトラマン、お前はもう十分地球のために尽くしたのだ。地球人は許してくれるだろう」

「ハヤタは立派な人間だ。犠牲にはできない。私は地球に残る」

「地球の平和は人間の手でつかみ取ることに価値がある。ウルトラマン、いつまでも地球にいてはいかん」

「ゾフィー、それなら私の命をハヤタにあげて地球を去りたい」

「お前は死んでもいいのか」

「かまわない。私はもう二万年も生きたのだ。地球人の命は非常に短い。それにハヤタはまだ若い。彼を犠牲にはできない」

「ウルトラマン、そんなに地球人が好きになったのか」

この会話を通じてウルトラマンが一貫してこだわっているのは、ハヤタを死なせたたくないということである。そのこだわりの強烈さに圧倒されたゾフィーは「そんなに地球人が好きになったのか」と絶句する。そのようなのである。主題歌では「地球のために」来たと言われるウルトラマンだが、彼が本当に愛したのは地球ではない。一人の地球人だったのだ。ウルトラ

マン自身が「ハヤタは立派な人間だ。犠牲にはできない」と語っている所から窺われるように、彼はハヤタと「一心同体」になることよってハヤタの人格を熟知することとなり、それを愛したのである。そして、ハヤタのために科学特捜隊を助け、人類を助ける。

ウルトラマンと呼ばれる神は憑依した人間への愛に溺れ、ひたすら人類に奉仕する。その愛は「正義」とは全く別の次元のものであり、結果的に正義を著しく歪めてしまうほどの偏愛だったのである。

注

(1) 切通理作『怪獣使いと少年―ウルトラマンの作家たち』(宝島社 一九九三年)

は、イデの疑問が解消することを金城の積極的な主張と解釈しているが、本稿はこれにくみしない。

(2) ベムラーは「宇宙の墓場」に運ばれる途中で脱走したのだから、また生きていたのである。そこから考えると「宇宙の墓場」というのは本当の墓場ではなく、流刑地または処刑場で、そこに送られた者は生きて帰ることはできないという意味で比喩的に「墓場」と呼ばれているものと思われる。

(3) 最終回に登場するゾフィーはウルトラマンに対して「M78星雲の宇宙警備隊員」と自己紹介しているが、彼がウルトラマンと同じ組織に属しているか否かは明確にされていない。しかし、同じM78星雲に同じような宇宙警察組織が複数存在するとは考え難い。また、ウルトラマンと別の組織に属する者がわざわざ迎えに来るのも不自然である。要するに組織が大規模で、ウルトラマンとゾフィーは同じ

組織に属しながらも、この時が初対面だったのであろう。

- (4) Aを載せる『新潮現代国語辞典』で「武力」を引くと、「武器を用いた力」と「武勇をふるう力」の二つの意味が載っているが、本稿では「武力」を後者の意味に用いることはしない。

- (5) 一九七四年の国連総会決議三三二四により国際法上初めて侵略が定義されたが、そこでは侵略は国家間の武力行使に限定されている。当時の国際情勢を考えれば、いや、現在でも、Bの「経済的な手段やイデオロギーで相手国を自国の支配下におくこと」を国連の議決で侵略と認めるのは不可能だろう。

- (6) Bには「自分かつてな」に続けて「利己的な国家利益にもとづいて」とあるが、そもそも利益追求はそれ自体利己的なものである。利益追求が必ずしも侵略につながるわけではないから、この部分は侵略の説明として意味をなさない。

- (7) 通常の用語法という観点からすれば、Aの「他人に対し」というくだりには、やはり違和感を禁じ得ない。例えば、強盗は他人の占有する家や店等に侵入して財物を略取するが、我々は普通これを「侵略」とは呼ばないからである。しかしながら、このことはウルトラマンの戦いの正当性を検証する上で全く問題にならないので、本稿では拘泥しないものとする。通常「侵略」とは呼ばれない行為であっても、当然守るべきルールに違反すれば犯罪なのであり、これと戦うことには正当性があるからである。

- (8) 第10回「謎の恐竜基地」に登場する怪獣ジラースは、マッド・サイエンティストに飼育されている。しかし、もともと野生の生物であり、餌を与えられているだけで、命令には服従しない。それで、野生と大差ないものと判断した。

- (9) 『ウルトラマン』の怪獣の多くは、もともと地球に棲息していた生物だが、彗星ツイフォンから飛来したドラコ(第25回)のように、地球の外から偶然飛来する怪獣もいる。そのような場合でも、人間のルールを理解できるほどの高い知能を有することが確認できない限り、侵略者とは言えない。なお、ドラコは地球の怪獣レッドキングに倒され、ウルトラマンと戦っていないので、ウルトラマンの正義について判定する対象とはならない。

- (10) ラゴンが言語や文明を有するという明確な描写はないが、原人という以上、一種の人類に違いないし、音楽を好むとされてもいる。それで、知的生命体であると判断した。ただし、放射能によって本能を狂わされたのだから、地上の人類と共通のルールに従うべきであるとは言えない。

- (11) ケロニアが言語を操り、たぐさんの円盤を建造し操縦していることから、人間と同等かそれ以上の知能を持つことは疑う余地がない。しかし、それを根拠にしてケロニアを、人類と共通のルールに従うべき存在と見なして良いかと言えば、微妙なものがある。ケロニアは植物であって、人間とは根本的に異質だとも言えるからである。草木が人間に無断で人間の生活領域に根付いても、我々はそれを侵略とは言わない。

- (12) キーラは宇宙ステーションV2を襲って乗組員たちを負傷させているが、それが何のためなのかは明らかにされていない。

- (13) ハヤタはウルトラマンと「一心同体」になって以降、ウルトラマンに変身したりハヤタに戻ったりを繰り返すのであるが、これは実はハヤタが随時ウルトラマンに変身していたのではなく、ウルトラマンが普段ハヤタになりすましていたのだ

と考えられる。ウルトラマンはゾフィーに「ハヤタは立派な人間だ」と言うが、ウルトラマンとハヤタの合体が「神がかり」であれば、ウルトラマンの意識がハヤタの意識に取って代わるから、ハヤタの意識はずっと途切れることになる。にもかかわらずウルトラマンがハヤタの人柄を知り、ハヤタになりきることができたのは、ハヤタの脳に保存されている記憶を読み取って言動したからなのである。

(14) 第1回「ウルトラ作戦第1号」の脚本は金城の師である関沢新一との共同執筆とされているが、基本的な内容は金城が考えたものに違いない。そのことは、このストーリーを金城が単独で小説化していることから窺われる。(円谷プロ文芸部の監修でノーベル書房から一九六七年八月に刊行された『怪獣大全集3 怪獣絵物語ウルトラマン』に金城が脚本を小説化したものが収録されている。)

(15) ちなみに、現代の沖繩を舞台とする映画『ナビィの恋』(中江裕司監督・脚本一九九九年)にも、ユタが人々の信仰を集める様子が描かれている。

(16) 切通前掲書による。なお金城の『ウルトラマン』メインライターとしての苦悩に関する本稿の記述は同書に負う所が大きい。

(17) 神がかりは一神教の信仰圏ではあまり見られないが、多神教圏では広く見られる現象である。そして、一神教の神が普遍的な摂理を司るとされるのは異なり、多神教では神は人間を平等に愛することはせず、これとは見込んだ者に特別の恩恵を授けるとされるのが常である。最終回にもう一人のウルトラマンとしてゾフィーが登場するのも、『ウルトラマン』の世界が多神教的な世界であることを暗示しているのではあるまいか。